

幕末期の佐賀藩の海外視察

羽場 俊秀

愛知学泉大学 家政学部

Foreign inspection of Saga clan at the end of Edo era

Toshihide Haba

Aichi Gakusen University

キーワード：幕末 at the end of Edo era, 佐賀藩 Saga clan, 海外視察 foreign inspection 佐野常民 Tunetami Sano

I.はじめに

幕末期の佐賀藩の教育政策について、倉沢剛は「藩地における教育と国内遊学や海外渡航における教育とは、幕末佐賀藩の教育政策の二大分野」と位置付けている。¹⁾

たとえば藩内においては弘道館（藩校）、蘭学寮、医学寮、海軍学寮において教育が展開されていた。それと同時に佐賀藩では長崎での造船伝習、海軍伝習、英学塾の創設をはじめ、伊豆の韮山の反射炉への人材派遣といった技術交流や教育活動を展開している。

とりわけ、長崎での海軍伝習に際しては、同藩からは48名の伝習生を派遣していて、最も多い数字となっている。次いで福岡藩が28名である。²⁾ 両藩とも寛永18年（1641）から長崎の警備を担当していたので、早い段階から風説書や蘭書などへの接触が容易となり、西洋の様子にも精通していた。

また、佐賀藩においては、幕府直轄の昌平校をはじめ、適塾（緒方洪庵主宰）、象先堂（伊東玄朴主宰）、咸宜園（広瀬淡窓主宰）といった教育機関へ人材を派遣している。中でも、藩別の入門者に限れば佐賀藩（肥前国）は、咸宜園の場合を除くと（咸宜園の場合は、472名の入門者で第4位）、適塾が53名、昌平校が48名、象先堂が45名でそれぞれ第1位を占めていて同藩の教育や学問に対する積極的な方針を見ることができる。³⁾

次に海外渡航の分野では、前掲『幕末教育史の研究』（3）には、明治維新以前以後に分類して渡航者、留学生の人名が記載されている。同書によれば、佐賀藩は明治維新以前（万延元～慶応3. 1月）は16名（薩摩藩が26名で第1位）、維新後は14名（長州藩が19名で第1位）となっていて積極的であった。

たとえば、万延元年（1860）の遣米使節団の際には、佐賀藩は（支藩の小城藩を含む）8名の参加があり⁴⁾ 文久2年（1862）の第1次上海使節団の時には4名を輩出しいずれも諸藩の中では一番多い。すなわち佐賀藩においては、当時海外への派遣を希望す

る藩士などが存在していたことになるが、佐賀藩10代藩主鍋島直正（以後直正とする）は幕閣との間に姻戚関係があるので幕府を憚り、海外への渡航には慎重な態度を取り続けていた。

幕府が海外への渡航を正式に認めたのは慶応2年（1866）4月8日のことである。⁵⁾ それゆえ慶応1年（1865）10月に佐賀藩士石丸虎五郎（安世）（1839－1902、我が国における通信機関の創立者）、馬渡八郎（不明－1875、明治政府に出仕）をイギリスへ留学させた際も「失踪」⁵⁾ という表現を用いている。

すなわち、慶応1年（1865）の石丸、馬渡の海外への渡航は藩の段階では禁止されていた時期の渡航であり、それまでの幕府による使節団への佐賀藩からの参加という観点からするとこの2人の場合は全く異質のものとなった。

そこで、本論文では、慶応年間の佐賀藩の海外視察を渡航の解禁以前と以後に分けて考察を進めていくことにする。なお、幕府は安政年間に締結された条約の改正及び開港時期を巡って万延元年（1860）から慶応3年（1867）までの間に米欧などへ8回使節団を派遣している。けれども、2回目の文久1年（1861）から8回目の慶応3年（1867）までの使節団については、現在使用されている歴史の教科書には十分な記述がなく、バランスを欠いた表現となっている。⁶⁾

II. 解禁以前の海外渡航

幕末期になると、幕府は正式の解禁以前に外国の学問の習得や技術の獲得のために、留学生を次々にヨーロッパへ派遣している。たとえば、文久2年（1862）のオランダ留学、慶応1年（1865）のロシア留学、同2年（1866）のイギリス留学がそれに該当している。⁷⁾

当時の日本においては、幕府の許可なくして海外へ渡航することは国禁とされていたので、密航という国禁を犯した手段を採用したのが長州藩と薩摩藩であった。長州藩においては文久3年（1863）5月に藩士5人を横浜の商人に依頼してイギリスに渡航させている。世に言う「長州ファイブ」である。当時同藩での海外での見聞体験者は文久1年（1861）の遣欧使節の際の杉徳輔、翌2年の上海視察の際の高杉晋作だけであった。⁸⁾ 高杉は、上海でアームストロング砲の威力を十分認識していたこともあり、西欧見聞の必要性を強く感じていて、そのことが慶応1年（1865）4月の同藩からの3名のイギリス派遣へとつながっていった。

薩摩藩においては、慶応1年（1865）3月に18名がイギリスに派遣されていて⁸⁾ 翌年3月までには5名がアメリカやイギリスへ派遣されている。しかしながら、これらの派遣は幕府からは許可されておらず密航であった。

これに対して、佐賀藩の場合は、石丸と馬渡の2人とどまっているので、慶応1年（1865）の段階（すなわち、幕府未公認の渡航）においては、同藩は長州藩や薩摩藩に対して遅れをとっていたことになる。

佐賀藩の海外渡航については、慶応1年（1865）までに3回行われている。いずれも幕府公認の海外派遣であり、1回目は万延元年（1860）の新見豊前守を正使とする遣米使節の時で、この時は前述のように8名をアメリカへ派遣している。2回目は文久1

年（1861）12月の竹内下野守らの遣欧使節の時、この時は2名が派遣されている。3回目は、文久2年（1862）4月の第1次上海視察の時、4名が派遣されている。

これらの派遣の場合はいずれも幕府が主導的な役割を發揮していて、佐賀藩が独自に行動していたという内容にはなっていない。すなわち、この点が長州藩や薩摩藩と異なる点であり、同藩では幕府の政策に違反する行動は認められなかった。なかでも「天下の大禁を犯して外国へ出奔する如きは、俗吏等の吃驚措を失ふ所以たらざるべからず、さてこそかくは弾劾に及びたるなれ」⁹⁾の記述からすると、長州藩や薩摩藩の密航を進めていた立場とはかなり異なった事情が佐賀藩には存在していたことは明白である。直正はこの史料によると「素より法を守るに厳格なれば、表面には敢て之を軽々に看過せられ」¹⁰⁾ぬと主張しているようである。

しかしながら、石丸と馬渡のイギリスへの渡航に関する出来事については、直正は表面的には否定しながらも家来の鍋島河内の説得を受け2人の渡航を認めることになった。すなわち、彼は、石丸、馬渡の2人の密航を黙認したことになるが、『公伝（5）』では直正に害が及ばないような「失踪」¹¹⁾という表現となっている。『公伝（5）』は大正9年（1920）に刊行されているので、このような記述はやむを得ぬことと考えられる。

石丸と馬渡の密航については、アンドリュー・コビングは『幕末佐賀藩の対外関係の研究—海外経験による情報導入を中心に—』の中で次のように推測している。¹²⁾すなわち、以前から長崎在住のイギリス人を通じて長州藩や薩摩藩に情報を提供していた石丸は、イギリス商人グラバーが慶応1年（1865）3月に薩摩藩と長州藩の藩士21名をイギリス本国へ渡航させた事実を知っていたに違いない。そして、グラバー自らが石丸に密航を勧奨したようである。以前から石丸も海外への渡航を希望していたこともあり、自発的に申し込んだものと考えられる。

ところで、石丸と馬渡の密航計画が直正のもとにいつ届いたのかについては明確になっていない。直正がグラバーと面会したのが慶応1年（1865）5月22日のことで、同年10月17日には石丸と馬渡は密航しているので、この時期あたりが考えられる。すなわち、留学の希望を石丸、馬渡がグラバーに示したところ、グラバーがそれに応じ、最後に直正がグラバーに依頼したという経過をたどったといえよう。

言いかえれば、石丸と馬渡の海外渡航に、グラバーと直正は深く関与しているが、正式に幕府が渡航を認める以前のことでゆえ、このような関係を隠すために「失踪」という形態をとって、石丸と馬渡はイギリスへ出発することになった。なお、その際の渡航費用はグラバーが負担することになった。¹³⁾

Ⅲ. 佐賀藩とパリ万国博覧会

フランス皇帝ナポレオン三世は、慶応3年（1867）3月にパリでの万国博覧会の開催に際し、わが国にも出品を求めてきている。そこで、幕府は諸藩にも呼びかけそれに応じたのが薩摩藩、佐賀藩であった。¹⁴⁾しかも、薩摩藩は薩摩藩主を「薩摩大守兼琉球国王」として、会場も幕府とは別に設け「琉球国産物陳列場」の名称で確保するに至っている。この点について、慶応3年（1867）5月28日付の『ザ・タイムズ』には「薩摩侯は代表に使節の称号を与えるのも正しくない。薩摩侯は日本の国王の臣下にすぎないから、

外国の宮廷に『使節』という代表を送る権限をもたない」¹⁵⁾と報じている。

この騒動は随行した外国奉行頭田辺太一と薩摩藩の責任者岩下方平および薩摩藩顧問モンブランの間で、琉球国王に関する標識の撤去という形で決着を見たが、幕府の権威の失墜は否めなかった。

一方、佐賀藩は薩摩藩のような行動には出ておらず、派遣された一人である佐野常民は「されば岩下は仕済し顔にて他人に向ひ、かくて徳川氏の面目を洋人群衆の前に塗抹したれば、我事は己に了れり。いざ是より帰国して皇政復古の運動に尽力すべし」¹⁶⁾という一文を残している。この文章からすると、佐野は薩摩藩の態度を苦々しく思っていたに違いない。なお、駐日大使フランス公使ロッシュは、將軍の近親者をフランスへ派遣し、日仏両国の関係を深めることを進言している。そこで、15代將軍徳川慶喜はこの勧告を受け入れ、実弟徳川昭武をフランスへ派遣し、その後数年間パリで留学させることにしたが、徳川幕府の崩壊により実現することはなく、彼は翌明治1年(1868)11月に帰国している。

徳川昭武一行は、慶応3年(1867)5月14日に、パリで開催された万国博覧会を見学している。日本からの出品物としては、銀細工、象牙細工の小道具、青銅器、日本刀、漆器など日本特有のものが陳列されていた。とりわけ、外国人に人気があったのは茶店であった。同行者の一人渋沢栄一はこのことについて『自伝』のなかで「露骨に申せば見世物扱ひにされていたのであるが、兎も角人気のあった事だけは事実である」¹⁷⁾と述べている。さらに、茶店同様日本からの曲芸師の軽業も外国人を魅了していた。¹⁸⁾

佐賀藩からの参加者は5人(小出千之助、佐野常民、野中元右衛門、深川長右衛門、藤山文一)で、パリ万国博覧会の報告書をまとめたのは佐野であり、通訳は佐賀藩蘭学寮で英語を教えていた小出が任に当たっていた。佐野は佐賀藩からの参加者では首席の地位が与えられていて、前述イギリス在住の石丸、馬渡を通訳兼書記官として随行させパリへ向かっている。

佐野は文政5年(1822)に佐賀藩士下村三郎左衛門の子として生まれ、11歳の時に佐賀藩主の侍医佐野孺仙の養子となっている。15歳の時に江戸へ出て同藩出身の儒学者古賀侗庵に入門し、天保10年(1839)に佐賀へ戻っている。そして24歳の時に、直正の命を受け、京都に遊学し蘭学者広瀬元恭のもとで蘭学を修め、2年後に緒方洪庵の適塾に入っている。さらに、伊東玄朴、戸塚静海のもとで研鑽を積み、伊東の主宰する象先堂においては塾頭にまでなっている。

そして、嘉永4年(1851)に長崎への遊学を命じられ、帰途佐野が以前学んでいた広瀬元恭のもとに立ち寄り、不遇をかこっていた石黒寛次、田中近江・儀右衛門、中村奇輔を説得して佐賀藩へ連れ帰り、直正に推挙している。彼らは、佐賀藩の科学研究所ともいべき精錬方に勤務することになり、佐野は主任を務めることになった。¹⁹⁾

また、安政2年(1855)から始まる長崎での海軍伝習において、佐野は佐賀藩出身の伝習生の指揮にあたっている。同藩の伝習生の一員であった中牟田倉之助は「(佐野)栄寿左衛門(常民)は年齢35歳にして、学生諸子よりも14、5歳年長者なるを以て、能く統率の任を尽し、傍、諸科を涉獵して知見を広めたりき。(中略)佐賀藩の子弟が他の列藩よりも梃でたるは彼の力によること頗る多しとす」²⁰⁾とのべ、佐野の果たした役割を高く評価している。安政6年(1859)8月に、佐賀藩内の三重津に海軍所(平成27

年7月に世界遺産に選定される)が設置され、同藩における海軍伝習が展開されることになるが、その際の推進役は佐野であった。彼は監督という立場にあり、慶応2年(1866)藩政刷新や軍制改革について、直正に建白書を提出している。²¹⁾すなわち、佐野は藩命により西欧へ出かける以前は、佐賀藩内の海軍教育に尽力していることがわかる。それゆえ、今回西欧へ出かける際にも、佐賀藩では兵制の視察やオランダからの軍艦建造を念頭に置いていたので、その任務を佐野に命じている。

西欧へ派遣する人物について、直正は「公は又政府に内示し、此機会を以て英学に通じ学問文才ある俊秀生2人を選びて、渡航親しく彼地の政治風俗歴史状態を視察せしめ、以てその聞見を委しく筆記して普く世に知らしむべし」²²⁾と考えている。すなわち、書記兼通訳の選出については、過去の海外への渡航経験者を優先したい旨を表している。2人のうち、1人は当時同藩内の蘭学寮で英語を教えていた小出千之助が適任と思われていたが、同寮での後任が不在となるために、小出の代わりに大隈重信の名が挙がっている。大隈の派遣については、佐野、副島種臣が推薦しているが、結局実現していない。ほかの1人は久米邦武が検討されたが実現には至っていない。そこで、万延元年(1860)にアメリカへ出かけた小出だけが選ばれることになった。

久米の回顧録には「公は佐野栄寿左衛門(常民)を2,3人の商人と共に仏国に赴かせ、また優秀学生2人を選びて渡航させ、委しく彼の地視察の要を書き取り報告させん為、1人は余を此の行に加へんと量定されたが、嘗て公が枝吉神陽に蘭学を勧められたとき、神陽が『夷狄の学は仕らむ』と謝絶して例あれば、『彼も夫ではないか、訪ねて見よ』と其の内意を洩されたので、余は『承知』の旨を答へた」²³⁾という記述があるが、「承知」と返答した久米の無念さが伝わってくる。なお、小出は慶応3年(1867)9月に落馬事故で急死している。将来を嘱望されていただけに、その死が惜しまれる。

佐野や副島の推薦にも関わらず、大隈が参加しなかったことは注目される出来事であった。前掲『公伝』(5)には「公が大隈は文筆のひとにあらず、彼は国に在りて別に驥足を展ぶる地あるべし」²⁴⁾とある。すなわち、直正は、大隈は「文筆」の人物ではないとみていて、彼に国内に残るように諭している。年齢から判断すると、佐野のほうが大隈より16歳年長ということになり、佐野は後輩の大隈を推薦していたのであるが、大隈は「その派遣委員の長ともいふべき佐野は、わたしが疑問としたばかりではなく、本当はわたしと気があわなかった」²⁵⁾と語っている。

2人の価値観の相違などから今回は佐野と大隈との組み合わせは実現していない。しかしながら、明治5年(1873)のウィーンでの万国博覧会の開催については、この2人が推進役となった。この時、大隈は総裁、佐野は副総裁という肩書で、佐野は同年1月31日に77名を引率してオーストリアへ出かけている。²⁶⁾

野中、深川は佐賀藩の商人であり、野中は佐賀城下の木材町の藩許烏犀円本舗第6代現源兵衛の養子九右衛門の長男として文化9年(1812)に生まれている。彼は、『仏国行路記』という著書でパリでの万国博覧会を紹介しているが、残念ながら病気のためにパリで客死。享年56。なお、同書はパリ万国博覧会の具体的状況を把握するうえで貴重な資料といえる。

深川は文久2年(1862)の上海視察の際、一員として参加している。身分は調役並沼間平八郎の従者で足軽であった。しかし、実際は足軽ではなく代々陶磁器製造を行う深

川家第8代当主であり、文久1年（1861）以来家業を継いでいる。それゆえ、上海視察の際一緒にあった長州藩の高杉晋作が「深川、山崎は勘定方の小吏にて、国産売り払いのことに關係せし人なる由にて、上海にて、日本諸物の相場、かつ唐物の相場を調ぶる様子なり」²⁷⁾と記していることから明らかなように「足輕」にとどまらない役割を果たしている。なお、同行者の藤山文一は精鍊方出仕しているが²⁸⁾、おそらく佐野が同所に勤務していた関係から藤山に同行が命じられたかと思われるが、詳細な記録は管見の限り見当たらない。

これらの記述から、佐賀藩からのパリ万国博覧会への参加者は5人となり、前述の石丸と馬渡がフランスに到着後合流し、合計7人ということになる。

IV. 佐野常民一行の視察

佐野常民を中心とする前述のパリでの万国博覧会への参加者5人は、慶応3年（1867）3月8日の夜11時頃イギリス商会の郵便船フィーロンに乗り込んで、同月14日の夜に香港に入港している。ここで彼らは10日間ホテル・デ・ヨーロッパに滞在することになった。この間に彼らは香港を見聞することになり、一足先に出かけた徳川昭武一行と同じコースをたどっている。同月16日の佐野の日記には「午後市街ヲ散歩ス 学校ニ到ル 支那人ノ罪ヲ犯ス者ト見ヘ二人宛鎖ニテ是ヲ連ネ」²⁹⁾とあり、彼らは当地の社会と学校に関心を寄せている。この学校は天保14年（1843）に伝道教会のジェイムズ・レッジが創設した英華書院のことであり、文久2年（1862）の竹内使節団の随員も見学しているほどの有名な学校であった。

翌17日の佐野の日記には「第1等教師フェツデリッキ、ストワルト来訪ス 依テ学校ノ教方ヲ尋問セシニ 学生七等ニ入ル者大抵7、8歳ヨリス 第1等に進ム者15、6歳ヨリ7歳位迄 7等ヨリ1等ニ昇ルノ年間敏捷ノ者ハ大抵6年ニ於テス 未教習折合ワザル故手間取レトモ近々進歩果敢取ルベシト 学校ノ生徒追々相増ス故英政府ニモ之ヲ喜ビ明歳ハ又教師ヲ送ルト 右教師既ニ5年滞在セル由 明日10時学校ニ到ルヲ約ス」³⁰⁾とあり、イギリス政府の対応や英華書院の教育制度を紹介し翌日の視察の約束をしている。

また、18日の日記には、英華書院の授業を見学し、その教育方法について詳細な記述がある。中でも『孟子』を英文に翻訳するクラスについては「是学生ニ清英両文ヲ翻訳セシムル由是レ蘭学寮ノ復文ノ如シ」³¹⁾との印象を書いている。そして、地理学の授業では、世界地図を壁にかけ指さしながら学生に尋ね、間違った場合は他の学生を指名するという方法を見学している。なお、これらを受講している生徒のレベルについては「客1等ノ書生ハ英学地理学算術等大抵進歩セシ様見ユ」³²⁾と高い評価を与え「教方ノ規則正シク且ツ綿密ナル事実ニ感心セリ」³³⁾と述べている。これらの記述から判断すれば、西洋式の教育方法を見学できたという点において、佐野は有意義な体験をしたことといえる。

それと同時に、佐野は3月17日の日記に「英兵卒ノ住厦数軒アリ 皆壯宏ナリ門戸其他兵卒小銃を携ヘ勤番セリ 小出或ル番卒ニ此地ノ兵数ヲ尋ネシニ英国兵780人印度兵900人ト答フ 修復場アリ 大砲其他圀所アリ又調練場アリ」³⁴⁾と記している。すなわち、小出の通訳により門番から駐留兵の人数を聞き出したり、大砲に関する情報を得ていることが分かり、佐野がこのような軍事関係の情報収集に熱心であったことを物語って

いる。

さらに、佐野は同月 19 日の日記には、「此局実ニ広ナリ 思ワザリキ此港ニ如此大局 アラントハ近年支那ノ諸港ハ勿論内地ニモ入り勝手ニ交易致ス由 其膏腴ヲ吸引スル此一事ニテモ知ルベシ 我日本ノ如キ支那ノ覆轍ヲ踏ザル様早ク醒目スベキ事ト感慨ニ堪ザリシ」³⁵⁾と述べている。すなわち、佐野は西洋の経済力が中国の内地にまで侵入していることを憂慮し、強い危機感を抱いていることが理解できる。

佐野一行は香港からシンガポールを経てスエズ運河に向かい、慶応 3 年（1867）5 月 5 日にマルセイユに到着している。到着直後の 5 月 8 日に深川が病気に罹っている。翌 9 日に深川は「前略 5 月 5 日仏国マルセール（マルセイユ）入港、無事上陸止宿仕候、今明日よりハレイス（パリ）江罷越可申筈候、扱當マルセール之繁花、諸品物美麗なる事筆紙に難尽、誠ニきもをつふし申し候、ハレイス此上如何思ひやられ申し候、尚後便委敷可申上候」³⁶⁾と、高揚した気持ちを吐露しているが、これが最後の記述となり「後便」で述べることはできなかった。

すなわち、深川はすぐに回復したが、今度は 5 月 12 日に野中が急病となり、翌 13 日に死亡している。野中の渡航については「野中元右衛門は生来の蒲柳の質で、家族らは彼の渡仏を憂ひ幾度か辞退させやうとしたらしいが、彼は『君命を以て死るも尚辞すべからず。フランスは仏国といふから、彼の地で仏となれば極楽浄土も近からう』と笑いながら快く派遣の大命を受けた」³⁷⁾という経緯があり、野中の派遣には健康上の心配から明らかに反対があった。

野中の死去について、佐野は「能く時勢を審にし、克く時機を察し、励精業に従ひ賢主の知に酬る孱弱の質を忘れ、海軍の危を冒し国を富すを是れ期す。志業未だ半ばならずして命を天涯に殞す。魂返らざるも美名長く垂れん」³⁸⁾という碑文を残している。佐野は野中に対して将来の貿易を期待していただけに、彼の死を人一倍悲しんだことであろう。それもあってか、佐野は野中を無理に誘ったので、その自責の念からか、野中の死を家族に伝えるのが遅れたと考えられる。³⁹⁾

慶応 3 年（1867）7 月 31 日には、佐野は同行の藤山と本来の目的である軍艦の発注のためにオランダへ向かい、9 月 20 日まで滞在することになった。オランダで佐野らの世話したのが、赤松大三郎（則良）であった。赤松は、伊東玄伯、榎本武揚、西周、林研海などと共にオランダ留学を命ぜられていて⁴⁰⁾、佐野と赤松は長崎海軍伝習所時代からの知り合いであった。後年、赤松は「佐賀藩が軍艦を和蘭へ注文するに就て佐野が鍋島家から出張を命ぜられることになり（中略）佐野栄寿左衛門（常民）は当時 40 余歳、外国語には通じなかったが進歩的な識見のある人で閑叟公の御信任の厚かった人であった」⁴¹⁾と書き残していて、佐野との友好的な関係を物語っているといえる。

佐野は軍艦の発注と共に、明治 1 年（1866）3 月 26 日には、小銃製造場において従来のゲウェル銃をスナイドル銃に改造する過程を見学しスナイドル式改造銃が比較的廉価で購入できることも知った。すなわち、オランダが従来採用していたゲウェル銃をイギリス製のスナイドル銃に変更している点に、佐野は注意を払っている。そして、佐野はロンドンに出かけ、同年 4 月 6 日には小銃製作場へ出かけており⁴²⁾、改めてイギリスが軍事面でオランダより優位に立っていることを認識したのである。

なお、佐野は明治 1 年（1868）3 月 7 日からは再び赤松と行動を共にし、同月 11

日には 300 人規模の「幼院」(孤児院)、12 日には 60 人規模の「貧院」(救貧院)と 830 人規模の「老院」(養老院)を見学している。⁴³⁾ さらに、佐野一行は『博物全書』、『蒸気車路程書』、『龍動ガイド』(ロンドンガイド)、リオン及びマルセイユの地図と共に、『啞者ノ書』が 1 冊含まれている⁴⁴⁾ ことからすると、佐野らは福祉施設に対しても大いに関心を寄せていたと思われる。佐野は後になると、大給恒と博愛社(日本赤十字の前身)を設立していったことを考えると、佐野が明治 1 年(1868)春に、オランダの福祉施設を詳細に調査していたことには留意すべきことと考えられる。

V. おわりに

本論文においては、幕末期の佐賀藩における海外視察について考察を進めてきた。幕府が公的に認可したのは、慶応 2 年(1866)4 月 8 日のことであり、それ以前の藩レベルの海外への渡航は認められておらず、やむを得ず密航、失踪という形態をとっている。佐賀藩は後の幕府公認の渡航では他藩よりも数的に優位に立っている。しかし、この時点では数的には長州藩や薩摩藩に後れを取っている。

そのため、慶応 2 年(1867)は佐賀藩にとっては海外渡航の分岐点の年であったと考えることができる。なかでも、慶応 3 年(1867)のパリで開催された万国博覧会の時には、佐賀藩からの参加者はフランスにとどまらず、オランダ、イギリスなどにも出かけ見聞を広げている。その際、中心的な役割を果たしたのが佐野常民であった。佐野は同僚の野中の急死に遭遇しながらも、与えられた使命に尽力していたことが理解できる。⁴⁵⁾

さらに、彼らの見聞してきた教育、産業、文化などの分野において、それ以降の日本人の生活様式に大きな変化をもたらしていったことについては言うまでもないが、詳細な内容については本論文では取り上げていない。

今回は、佐野を中心に幕末から維新时期における佐賀藩の動向の一端について展開することができた。しかし、この時期の佐賀藩および同藩出身者の活躍については過小評価され続け今日に至っている面がある。一つ例を挙げれば、中学校や高等学校の教科書に見られる江藤新平についての記述である。そこでは「佐賀の乱」の首謀者として登場しているのみで、⁴⁶⁾ 彼が文部省や司法省の創設に力を尽くしたということについては、全く記述されないまま今日に至っている。この点についての解明も今後の課題として残されている。

注

- 1) 倉沢剛『幕末教育史の研究』(3) 48 頁、吉川弘文館、1986.
- 2) 江藤淳・勝部真長編『勝海舟全集(12)』124-125 頁、勁草書房、1994.
- 3) 佐賀県教育史編さん委員会編『佐賀県教育史第1巻』132-148 頁、佐賀県教育委員会、1988.
- 4) 同前、52-53 頁には、小城藩の2人は含まれていない。
- 5) 文部省編『日本教育史資料(7)』662 頁、臨川書店、1980.
- 6) 具体的な内容については、「幕末の佐賀藩と遣外使節」(平成28年度ライフスタイルデザイン総合研究所研究発表 於愛知学泉大学平成28年9月6日)のタイトルのもと発表している。
- 7) それぞれの留学については、前掲『幕末教育史の研究』(2) 405-635 頁、1984 に具体的に記されている。また、同書(637-730 頁)には、幕府が諸外国に派遣した遣外使節団について詳細な記述がある。
- 8) 五代龍作編『五代友厚伝』32-35 頁、大空社、1998(復刻)
- 9) 中野礼四郎編『鍋島直正公伝』(5) 560-561 頁、侯爵鍋島家編纂所、1920.
- 10) 同前
- 11) 5) に同じ
- 12) イギリスにおける石丸と馬渡については、アンドリュー・コビング『幕末佐賀藩の対外研究—海外経験による情報導入を中心に—』73-91 頁、鍋島報効会、1994 に詳しく述べられている。
- 13) 同前
- 14) 1) 716 頁
- 15) 国際ニュース事典出版委員会編『外国新聞に見る日本① 1852-1853』409 頁 毎日コミュニケーションズ 1989
- 16) 9) 55-66 頁
- 17) 渋沢栄一述『渋沢栄一自叙伝』167-168 頁、大空社、1998
- 18) 15) 413 頁
- 19) 秀島成忠編『佐賀藩海軍史』386 頁、知新会、1917
- 20) 中村孝也『中牟田倉之助伝』127 頁、杏林舎、1919
- 21) 19) 317-349 頁
- 22) 9) 575 頁
- 23) 久米邦武『久米博士九十年回顧録上巻』661 頁、宗高書房、1985(復刻)
- 24) 9) 576 頁
- 25) 木村毅監修『大隈伯昔日譚』91 頁、早稲田大学出版部、1988
- 26) 角山幸洋『ウイーン万国博の研究』(関西大学出版部、2000)には当時の具体的な状況が描かれている。
- 27) 高杉晋作『内情探索録』(田中彰校注『日本近代思想体系(1) 開国』、243 頁、岩波書店、1996
- 28) 9) 368-369 頁

- 29)～35) 佐賀県立図書館所蔵『佐野常民日記』、なお、同日記には当時の具体的な様子が描写されていて、史料的にも高い価値がある。
- 36) 「野中元右衛門書簡」(鶴田伸義『仏国行路記』、野中烏犀園、1936) 351 頁
- 37) 「慶応3年巴里萬国博の回想」(同前) 36 頁
- 38) 36) 94 頁
- 39) 36) 77 頁
- 40) 日蘭学会編『幕末和蘭留学関係史料集成』40-41 頁、雄松堂出版、1982
- 41) 赤松範一編注『赤松則良半生談—幕末オランダ留学の記録』199 頁、東洋文庫、1977
- 42) 43) 前掲『佐野常民日記』
- 44) 佐賀県立図書館所蔵『御書物御図類目録』には「辰(明治1年)8月19日三御丸より拝借」と記されている書籍67冊と7枚の地図が載っている。
- 45) 羽場俊秀「慶応年間の佐賀藩の西欧視察」(福岡博先生古希記念誌『佐賀の歴史と民俗』2001)を参照。
- 46) 毛利敏彦『幕末維新と佐賀藩』(中公新書、2008)は、江藤の果たした業績を正当に評価していて、同書は当時の具体的状況を知るうえで貴重な文献であるといえる。